国指定史跡 上神主・茂原官衙遺跡の時代

古代の郡役所

皆さんは役所というと、何を思い出しますか？　鉄筋コンクリート建物を思い浮かべる人、住民票を取りにいく窓口、税金について相談する課、又は学校についての手続きを行う教育委員会など、様々な仕事について思い浮かべる人もいると思います。しかし、古代の郡役所はどのようなところでしょうか？　との問いかけに対して、答えられる人はなかなかいないと思います。

古代の郡役所の仕事は多岐に渡り、税の徴収から警察業務、そして裁判などの司法業務まで行っていました。これらの仕事を行う役人の数は、郡の規模によってきめられていました。規模は郡の中にある里（のちの郷）の数によって、16から20里を持つ郡は大郡、12から15里は上郡、8から11里は中郡、4から7里は下郡、2から3里が小郡と決められ、三川など10里を抱える当時の河内郡は、中郡に位置づけられました。

中郡の職員の定数は、正規の職員であり在地の有力豪族から任命された郡司が4名で、雑務を行う徭丁が約850名でした。しかし、これだけの人数で仕事をこなすことはできないので、正規の任用手続をしていない役人や、職員を雇用して業務を維持していました。

次に、郡役所の施設について説明しましょう。当時の郡役所の様子を伝える文書には、数棟の大型建物で構成され郡司たちが執務する「政庁」、農民から税として徴収した稲などを収蔵し、その規模は郡の繁栄を表すといわれる「正倉」、役人の寝食にかかわる施設である「館」、宴会の食事や使者などの食事を準備し食料を管理した「厨家」、このほかにも「竈屋」「納屋」「備屋」「酒屋」などの諸施設や、周囲を区画する「門」「垣」で構成されていたと記されています。上神主・茂原官衙遺跡では、大型の建物が並ぶ政庁と、整然と多くの建物が並ぶ正倉のほか、門も見つかっており、当時の郡役所の様子が良くわかります。このほかにも、出土品などからは性格がわからない建物跡がいくつかあり、これらがまだ見つかっていない館や厨家などの施設の可能性があります。

現在は、緑広がる上神主・茂原官衙遺跡ですが、1300年前のこの地には、地道な仕事に励んだ多くの名も無い人々がいたことが、発掘調査で明らかになったのです。

復元イメージ図

広報俳句

水無月や雉子の声きく鬼怒あたり　浜野　正男

万緑に棲む風の音水の音　大八木喜重郎

失ない掛けし記憶のあらたに蛍舞ふ　柳田　石村

白鷺の憩に適ふ休耕田　蓬田　四方

千年の涸れぬヒゲ沼蛍舞ふ　伊沢　静香

花菖蒲陽光に戯れ凛と咲く　濱野　マス子

木漏れ日たひかりを集め蛇苺　阿部　信子

ふる里に丹精こめし蛍舞ふ　野沢　花枝

初蛍息をすること忘れけり　上野　キミエ

ほたる見の夕闇破る子等の声　武井　ミイ子